

編集後記

本誌12~14巻にかけて、腸結核、クローン病およびその疑診例、いわゆる回盲部近傍の単純性潰瘍と重ねた“腸シリーズ”は、腸の炎症性疾患を本邦独自の手法を用いて再整理しようとする目的を有していた。そして、これらの“腸シリーズ”は、いろいろな面から本邦の腸疾患に対する認識を高めるのに役立ってきたと自負している。

今回の虚血性腸炎特集も、竹本、川井両教授の臨床面、武藤氏の内視鏡、生検からの分析など同じ目的にかなうものと思う。また、岩下、飯田両氏の論文は病理の材料に対して臨床を加味した経時的分析を加えることで、新発見が得られている。

牛尾氏の本号論文での引用および白壁教授自身の序説にもみられるように、消化管の炎症性疾患の分析には、病期と病変の程度を考慮に入れてかかることが大切である。

本症は疾病概念として確立されてからまだ月日も浅く、また急性腹症に近い臨床像を有して検査がやりにくい面を有しているが、やり方によってはもっときめ細かい分析が可能なのにも思われる。

本号を基盤として、今後、先輩たちが残してくれた優れた形態学的分析方法を用いた症例が集積され、欧米の荒っぽい分類や診断学を凌駕する研究が生まれることが望まれる。

＜八尾 恒良＞